**聖霊降臨節第1主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年５月19日**

**「聖霊の恵み」**

**イザヤ書32章15節**

**32:15 ついに、我々の上に／霊が高い天から注がれる。荒れ野は園となり／園は森と見なされる。**

**使徒言行録14章8～20節**

**14:8 リストラに、足の不自由な男が座っていた。生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがなかった。**

 **14:9 この人が、パウロの話すのを聞いていた。パウロは彼を見つめ、いやされるのにふさわしい信仰があるのを認め、**

 **14:10 「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と大声で言った。すると、その人は躍り上がって歩きだした。**

 **14:11 群衆はパウロの行ったことを見て声を張り上げ、リカオニアの方言で、「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった」と言った。**

 **14:12 そして、バルナバを「ゼウス」と呼び、またおもに話す者であることから、パウロを「ヘルメス」と呼んだ。**

 **14:13 町の外にあったゼウスの神殿の祭司が、家の門の所まで雄牛数頭と花輪を運んで来て、群衆と一緒になって二人にいけにえを献げようとした。**

 **14:14 使徒たち、すなわちバルナバとパウロはこのことを聞くと、服を裂いて群衆の中へ飛び込んで行き、叫んで**

 **14:15 言った。「皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、わたしたちは福音を告げ知らせているのです。この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です。**

 **14:16 神は過ぎ去った時代には、すべての国の人が思い思いの道を行くままにしておかれました。**

 **14:17 しかし、神は御自分のことを証ししないでおられたわけではありません。恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たしてくださっているのです。」**

 **14:18 こう言って、二人は、群衆が自分たちにいけにえを献げようとするのを、やっとやめさせることができた。**

 **14:19 ところが、ユダヤ人たちがアンティオキアとイコニオンからやって来て、群衆を抱き込み、パウロに石を投げつけ、死んでしまったものと思って、町の外へ引きずり出した。**

 **14:20 しかし、弟子たちが周りを取り囲むと、パウロは起き上がって町に入って行った。そして翌日、バルナバと一緒にデルベへ向かった。**

**先月中旬に妻と一緒に高島公園にお花見に行きました。満開の桜がそれはそれはキレイでとても恵まれた時を過ごせました。去年の春先は特に慌ただしくてお花見どころではなかったですので、諏訪に遣わされて2度目の春を迎えてようやくお花見ができるくらいに気持ちのゆとりができてきたことを改めて思いました。**

**私と妻にとっては今年の冬は諏訪で迎える初めての冬でした。暖冬だと言われていても連日の氷点下はやはり厳しい寒さでした。2月から3月にかけて積雪が何度かあり、その度に雪かきを行いました。少しずつ寒さが緩んで、日差しのぬくもりを感じるようになり、花々や木々の芽吹きを見た時ようやく待ちに待った春が近づいて来たことを感じました。4月に入り急に暖かくなり春本番になりました。冬から春へと季節が進み、植物も動物も私たち人間も春の喜びを感じているように思いました。寒さの厳しい地域だからこそ春の訪れの喜びは大きいのだと思います。そして今は新緑の美しい季節となりました。また、この時期にしか取れない山菜などをいただくとこの季節の恵みを強く感じます。そして、もう少しすると梅雨が来て暑い夏がやってきます。さらには、秋にそしてまた厳しい寒さの冬へと。**

**このように、日本に住む私たちは四季を感じることができます。春夏秋冬それぞれの恵みを日々感じながら歩むことができるのです。それは季節が巡ってきたら当たり前のことなのかもしれません。豊かな自然の中で暮らしていれば自然の恵みをより感じることができるのは当たり前であり、自然の恵みには何の力も働いていないと思う人が多いのかもしれません。そこに神を感じないで、さらに言えば「神はない」と考えて生きている人が現代社会には多いのかもしれません。**

**私たちキリスト者はそこに神様を見るのです。太陽が勝手にのぼり日が差して日が沈み、その繰り返しの中で勝手に季節が進み、豊かな実りや恵みは単に自然が与えるのではなく、ましてや人間が生み出したというわけでもなく、神様がこの豊かな自然も緑の恵みも作物の恵みも与えて下さっていて、その神様が与えて下さる豊かな恵みの中で感謝をもって日々歩むことができる、私たちはそのように信じて歩むのです。私たちの日々の歩みというのは神様の恵みの中を感謝をもって歩むものなのであります。**

**今年もペンテコステを迎えました。今年はイースターが早いですので、必然的にペンテコステも早くなります。祈る弟子たちに聖霊が降り、教会が誕生し、その後聖霊の導きでイエス・キリストの十字架と復活の伝道が世界中へと広がっていったのです。今日は教会の誕生を祝うペンテコステ礼拝です。そのペンテコステ礼拝で私たちは改めて聖霊の働きに心を留めていきたいと思います。**

**第一次伝道旅行も佳境に入ってきました。イコニオンを出たパウロとバルナバは南西に約40キロ離れたリストラに行きました。この町に生まれつき足の不自由な男性がいて、その男性をパウロが癒しました。躍り上がって歩き出したのです。その様子を見た町の人々は「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった」と言って、バルナバを「ゼウス」と呼び、パウロを「ヘルメス」と呼んでいけにえまでささげようとしたのです。**

**なぜ、このようなことになったのかと言いますと、この地方に古い言い伝えがあるからです。その言い伝えとは、昔、ゼウスとヘルメスという二人の神々が人間の姿に変装してこの地方をお忍びで訪れました。彼らは正体を明かさずに旅をしたので、家に泊めてもらおうとしても誰も泊めませんでした。しかし、一組の貧しい老夫婦が神々を家に招き入れて丁寧におもてなしをしました。その結果、この一組の貧しい老夫婦以外の町の全ての人々は神々が起こした洪水によって地上から拭い去られたというものでした。リストラの人々はパウロとバルナバに人間以上の力を感じたのでしょう、だからこそパウロとバルナバを神々として祀り、丁寧におもてなしをしようとしたのです。リストラの人々は神々に失礼があってはいけないと思って取った行動ですが、彼らのとった行動というのは人を神にしてしまう偶像崇拝そのものでした。**

**ですからパウロとバルナバは服を裂いて叫んで言うのです。「皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、わたしたちは福音を告げ知らせているのです。」（15節）人間を神とする偶像崇拝から解き放たれて生ける神に立ち帰って欲しい。そのために私たちはイエス・キリストの十字架と復活の福音を語っているのだというのです。**

**ただ、このリストラの人々は聖書が証しする「神」について全く知らないと言ってもいい異邦人たちのようでありました。だからこそパウロは「神」がどのようなお方であるのかをまず語るのでした。「この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です。」（15節）とまず父なる神様は天地万物の造り主であることを語るのです。全ては神様によって造られたのだ、まずそのことをパウロは語るのです。その神様は人々が思い思いの道を行くままにされていたのです。しかし、神様はご自身のことを証しをされてきたのです。それは今だけではなくてはるか昔から神様はご自身を証しをされてきたというのです。**

**「恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たしてくださっているのです。」（17節）パウロは神様を知らないリストラの人たちに神様の恵みをこのように伝えるのです。天からの雨も神様の恵みの雨、その恵みの雨によって作物は育ち、実りの季節を迎え、その作物の実りによってあなたたちに食べ物を与えて下さったのが父なる神様である。その神様が与えて下さる自然の恵みによってあなたたちの心は知らない間に喜びに満たされているのだ。それらの恵みは自然が勝手に進んで勝手に作り出されたものではなくて、全ては神様の恵みの中で季節は進み、農作物は育ち収穫して豊かな恵みをいただき、あなたたちに喜びを与えて下さっているのが私が伝えている神様である。この神様は今も生きておられる。神を信じなさい。神に立ち帰りなさい。パウロはそのように神様を伝え、神様の恵みの中をあなたたちは今まさに歩んでいることを伝えたのです。**

**パウロのこの言葉を聞いたリストラの人々は偶像崇拝を止めました。それは神様の恵みの中で生かされていることに気づかされて、生ける神様に立ち帰り、ここリストラにもキリスト教会が誕生したということです。**

**しかし、アンティオキアとイコニオンからユダヤ人たちがやって来て、パウロに石を投げつけて、死んでしまったと思った彼らはパウロを町の外に引きずりだしました。パウロは生まれつき足の不自由な男性が立ち上がったように、起き上がって、バルナバと一緒にデルべに向かったのです。聖霊に導かれてイエス・キリストの十字架と復活の福音をさらに宣べ伝えるために。**

**このリストラの人たちは私たち日本人と似ているところがあるなと思わせられるのです。彼らは最初パウロが語る福音を聞いていました。しかし、その福音を信じて受け入れようとしたのは生まれつき足の不自由な人だけでした。人々はパウロが行った奇跡行為、つまり目に見えるものだけに心を奪われて古い言い伝えに縛られてパウロとバルナバを神に祀り上げようとしたのです。何か目に見えるものばかりに心奪われて、神でないものを神とする偶像崇拝。自然においても人においても神でないものを神として安心感を得ようとするのは、結局は「神はいない」と考えるからです。天地をつくり私たちをつくってくださったのは父なる神様の深い愛だと信じることができないから、イエス・キリストの十字架も復活も信じることができないから、自分たちで勝手に神を造り出して安心感を得ようとするのです。**

**そんなリストラの人々にパウロが語った言葉はまさにこの自然豊かな中で生活する私たち日本人に向けて語られたのです。**

**「恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たしてくださっているのです。」（17節）**

**眩い日差しで私たちを照らす太陽をつくられたのは誰か。天から恵みの雨を降らせてくださるのは誰か。季節を進ませ、実りの季節を与えて下さるのは誰か。豊かな植物や農作物を与えて下さるのは誰か。そのような恵みによって私たちの心を喜びで満たしていてくださるのは誰か。それが「天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方」である神様です。神様の大きな恵みによって私たちは愛されて生かされているのです。そして、それが神様の恵みだと気づくことができるのは聖霊の働きなのです。聖霊が働いて下さるおかげで、私たちは日々神様の恵みの中を感謝をして生かされて生きていくことができるのです。**

**聖霊って目に見えないですし、中々わかりにくいところがあります。けれども、今私たちがこうしてペンテコステ礼拝に招かれて共に神様に礼拝をささげることができるのも、お祈りや信仰告白に「アーメン」と言えるのも、牧師が語る説教に「アーメン」と言えるのも全て聖霊の恵みなのです。特に今日はこの後聖餐式が行われます。イエス様の十字架の死がこの私の罪の贖いのため、イエス様の十字架と復活の出来事がこの私のためだと思い起こすこそができるのは聖霊の恵みなのです。だからこそ私たちは感謝をして聖餐に預かることができるのです。**

**私たちは聖霊の恵みによって生かされているのです。日々感謝して歩んでいきましょう。そして、一人でも多くの人が聖霊の恵みの中を生かされていることに気づかされるように、御言葉に聴き、祈り、イエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝えていきましょう。**